

ふゆの日

月子さんと

僕は

ゆっくり

歩いていた

黄色い月が

つややかな

液体のように

うかんでいる

ふるえる空気は

しみしみ

音がして

木霊たちも

集まりだしたようだ

くらがりに

鹿のひとみが光る

しばらくすると

橙の

あかりこぼれる

町にちかづいてきた

僕が

いつもより

ちいさな声で

どこに向かっているのかなと  
きくと

はじめての場所に

月子さんは

ほほえんで言った